

ひと街にと

No. 43

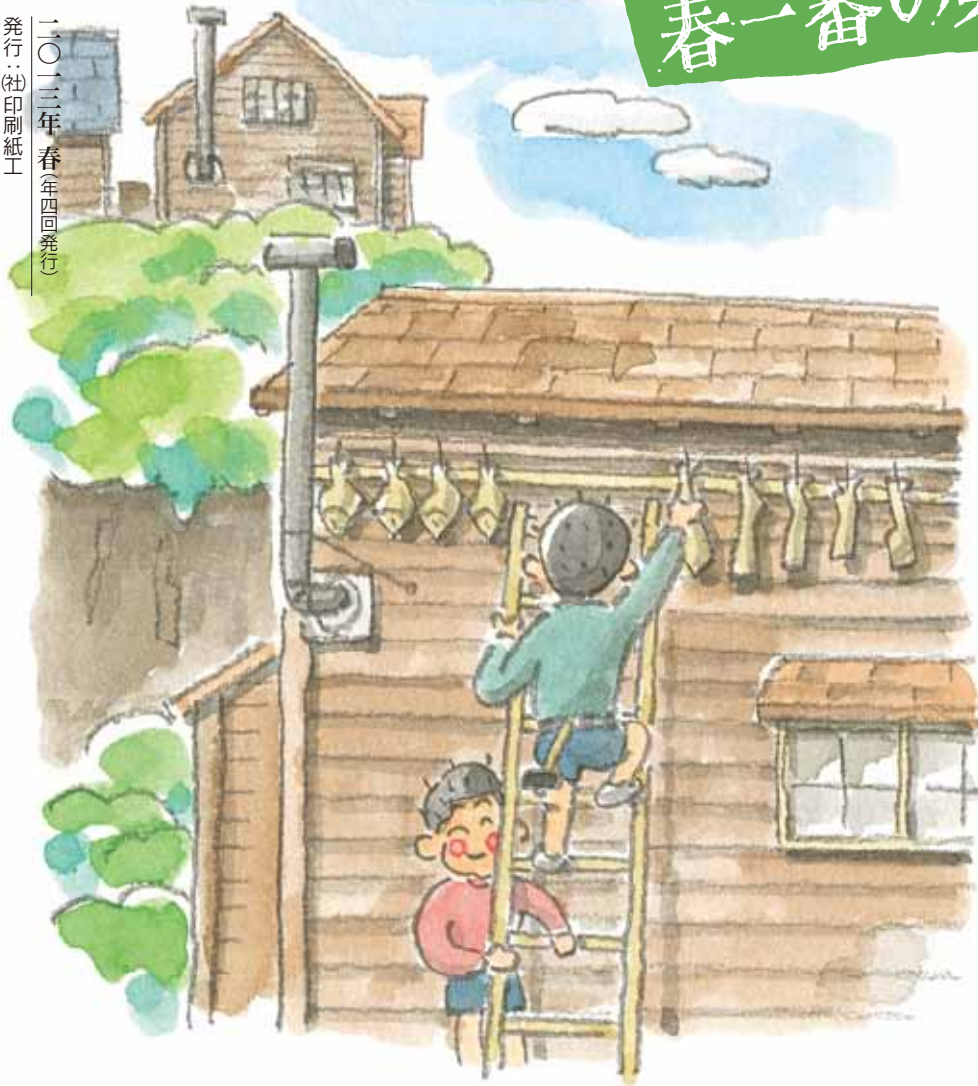
語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです。
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが、
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら、
いつか来た道まで戻ってみましょう。

春一番の楽しみ!?

いけないことと知ってはいても、い
たずらのタネは尽きまじです。港町の
悪ガキたち、春の楽しみは軒先にぶら
下がった棒ダラを失敬すること。そつ
たらモン、かたくて食えねえべさー
なんていう心配はご無用。金づち携帯
なのでございますよ。おあつらえ向き

にどこの家にもはしごまであります。
そんなにあわてて仕事を済ませなくて
もよかったのは、大人たちも大目にみ
ていたから。どのみち冬の残り物、子
供たちはおなかを空かせてもいたので
す。カレイなんかもあつたけど食べづ
らくて。やつぱり棒ダラがよかつたな。



二〇一三年 春(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1598

編集：ひと街にと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目
北海道不動産会館四階

TEL(011)631-6651

30年前まで木造駅舎、 例外なく再開発の波。

都市がいかに変貌していくものか、最もよく
わかるのが鉄道の駅とその周辺です。JRタワ
ー(札幌駅)の10年前
を思い起こしてください。こちらは往時の琴
似駅と駅前界わい。木
造の駅舎は昭和45年
(1970)当時のもの
です。同57年(1982)、
函館本線の高架化工事
に伴って解体。発寒側

木造の旧琴似駅舎(昭和四十五年)



に数百m寄った地点に新駅が出来ました。
高架化の完成は同63年(1988)、続いて平
成14年(2002)に現在の駅がオープンして
います。高架化で駅南側にあった“開かず
の踏切”が解消して、車の流れがスムーズにな
りました。今では地域の再開発も進んで、高層



まちのメモリー——琴似駅

マンションの林立が目立ちますが、古い商店街
も健在。買い物時の賑わいはここならではです。
そんな魅力も手伝ってか、琴似駅の一日の乗降
客数は道内で5番目だそうです。



右/昭和四十五年の琴似駅前通、開か
ずの踏切をS.L.が煙を上げていく
中/琴似駅前から三角山を望む(昭和
三十二年七月、渡辺良平さん撮影)



時の街角

北海道開拓の村から

●北海道開拓の村 所在地／札幌市厚別区厚別町小野幌五〇―一
電話〇二二八九八―六九二

この寮生だった人や中をのぞいたことのある人の、多くがかなりの年齢になっていることでしょう。北大の壱からの象徴だった旧き時代の恵迪寮です。

「都ぞ弥生」生んだ遠き良き青春時代。

旧札幌農学校寄宿舎(恵迪寮)

現在は鉄筋コンクリート造五階建て六棟の北海道大学恵迪寮。ホームページが開設され、寮歌の着メロまでありますが、この旧札幌農学校寄宿舎の古色を前にすると、いかに時代が変わったかが感じられます。北大の前身である札幌農学校の開校は明治九年(一八七六)。札幌時計

十八条に移転、改築。開拓の村に展示されている建物は、昭和五十八年(一九八三)まで学生が生活していた四棟の寮の一部です。平屋の舎監棟と渡り廊下でつながる二階建て左右二棟の木造寄宿舎。ま

台のある一帯に校舎も寄宿舎もありました。明治後半に理学部前(北八条西八丁目)に移り、新しい寄宿舎に恵迪寮と命名されたのが同四十年。寮歌「都ぞ弥生」は同四十五年に作られています。昭和に入って再び北



玄関のある舎監棟から渡り廊下を伝って左右の寮室棟へ
右中は舎監室の内部、右下は4人部屋の再現。寮室の汚さは語り草となっている



木造瓦屋根、下見板張りなどはいかに和風だが
屋根のドーマー(出窓)や上げ下げ窓は明治の流行のようだ

解体する時はトタン屋根だったので、復元時に明治期の瓦葺きに戻してあります。その瓦屋根から飛び出しているドーマーは、官公庁の建造物の流行だったようです。

玄関入ってすぐ右手が舎監室。左に応接室。舎監という言葉も現代にはなつかしい言葉かもしれません。右の渡り廊下を行くと一、二階の四つの寮室に、年代ごとの学生の生活ぶりが再現されています。こんなにきれいだっただけ？ とおそらく誰も同じ感想でしょう。当時の、足の踏み場もないほどの想像を絶する空間は、もはや語り草ということにしておきましょう。

建物や時代が変わっても、そうした青春が学生気質として少しでもいまにつながっていれば幸いです。

人のいしぶみ

札幌の小学生なら誰でも知っているけれど、大人になったらみんな忘れてる人



島義勇像

(北海道神宮、札幌市役所一階ロビー)

明治二年も 円山の絶景。

物、島義勇。佐賀藩士で、開拓判官として明治二年(一八六九)十一月、札幌の都市計画を練るために円山に登り、現在の南一条通りと大友堀(創成川)を札幌本府の南北の基線と定めて、建設に着手しました。

しかし費用の不足を訴えて翌三年に札幌を去り、四年後の佐賀の乱で刑死するという波乱の生涯です。とはいえ札幌では、その人形があしらわれている北海道神宮例大祭の山車があるほど、「判官さ

まとしてあがめられてもいる人物です。銅像は北海道神宮の神門そばと、札幌市役所一階ロビーに。円山公園内に顕彰碑があります。 当時はコタンベツの丘と呼ばれていた

円山の標高は二二五尺。裏参道にある大師堂から登る道が一般的で、子供たちの遠足コースにもなっています。八十八か所の石仏を数えながら約三十分で頂上。見晴らしのよい百九十万都市の眺めに、判官の気分が味わえます。



標高225m、円山頂上からの札幌市街地の眺め。小学生も登る遠足コースだ
下右は北海道神宮内の、見出し横は札幌市役所ロビー内の島義勇像

※参考文献／「北海道開拓の村・開校10周年記念誌」

※参考文献／「中央区・歴史の散歩道」



まちの仕事

繊なかむら美巧社

中村昌彦さん

札幌市白石区南郷通十四丁目
北六番十八号
電話〇二〇八六一一九七八



この道56年の中村昌彦社長と
デザイン担当の息子の明彦さん

スポーツイベントの看板
印刷したものを張ってある



付ければよいだけ。インクジェットプリンターはパソコンによるデザインを紙や樹脂布などに印刷。それをカットして張り合わせるという一連の作業です。ここで問われるのが継ぎ目がわからないようにうまく張り合わせる技術といえますから、これはもう別の専門職になりそうです。

コンピューター化で業界は技術より価格競争の時代になってはいますが、若い人がこの仕事に入りやすくなったことも事実。こちらでも息子の明彦さん(四)が専門学校を出

「手で描く」から「張る」時代へ。

来たことのない街を歩きながら、ふらつと入って来た、例えば飲食店。気づかないけれどそこを選んだ理由の一つが、店の看板ということも多いはず。中村昌彦さん(七)が看板製作の道に入ってから半世紀以上が過ぎました。町の看板職人入門した当時、水性ペンキは粉末の顔料をニカワで混ぜて使い、油性ペンキはおいしいの強い質の悪いもの。トタン板などに黙々と刷毛を運んでいました。絵画や書道が好きだったこともあって上達も早く、昭和四十一年(一九六六)、結婚を機に独立。同四十七年に広告美術一級技能士に合格しています。

その手描きから機械による作業へ――

看板製作の半世紀、
「手で描く」から
「張る」時代へ。

トプリンターという便利な機械が出現しました。どちらも今では自宅やオフィスで小型のものを簡単に操作できる時代ですが、これが看板職人を「張り屋」(中村さん)に変えたのです。カッティングマシンは、機械が切り出してくれる絵や文字のフィルムシートを張り



上/プラスチック板に印刷物を張る
中村さんにはとくに卒業した仕事
左/こちんまりした明彦さんの作業室
パソコンでデザインして印刷機へ



看板屋さんの昔ながらの仕事は屋外広告のパネルなどの組み立てだけ
下左は大型のインクジェットプリンター 下右はカッティングシート

てデザインを担当し、様々な注文に添えています。中村さんの長いキャリアと誠実な仕事ぶりは一方で、全道の同業者を束ねる一般社団法人・北海道屋外広告団体連合会会長としても適任です。同連合会は昨年、北海道と良好な広告景観形成のための連携協定を結びました。また札幌市広告アドバイザーとして市電やバスの広告審査にもあたっています。社員三人という小世帯ではまだまだ現役と、経営に公職に忙しい中村さんです。

道具で 道草30年 坂一敬

レトロスペース坂会館館長
坂栄養食品開発部長

四月四日の午前中、二階で作業していたら電話だと私を呼ぶ声。受話器を取るとアテネ書房(札幌市中央区北二西三)店長の中津川さんで、六月一杯で店を閉じなければならなくなったとのこと。売り上げは下降の一方で、店頭でもほとんど売れなくなってきた。月百万という高額の賃料を払うのももう限界という。

城馬さんが寄る年波(大正十三年生まれの八十九歳)で入院して以来、中津川さん以下のスタッフ全員で支えてはいたのだけれど、全国展開する大型店の進出と、本離れて苦戦は続いていた。地域に根差したこういう書店は地方文化を守るために必要と、講釈を並べる自称文化人に限って小さな店で本を買わない。年で老眼

本屋の灯、アテネの灯。

中津川さんは、店主の城馬秀子さんがこの人ならと見込んだ女性(頭が切れて勉強家で真面目で、おまけに美人といつも城馬さんがほめていた)。その彼女が下した結論だ。私が言うべき何物もない。アテネとは東京から帰ってきてカムイ伝全二十一巻を買って以来の付き合いだから、もう三十年近くになる。小林多喜二の全集も左傾学生の手記も、西岸良平の夕焼けの詩は今でもここで買っている。店に寄ると、城馬さんはお茶を飲みに行こうと私を誘い、中津川さんに留守を頼んで、飽きることなく本のことを話し合った。



アテネ書房が新聞で紹介された時のスクラップを持って。右端が店長の中津川操さん。左へスタッフの高岡純子さん、宝賀美香子さん、今野弘子さん。

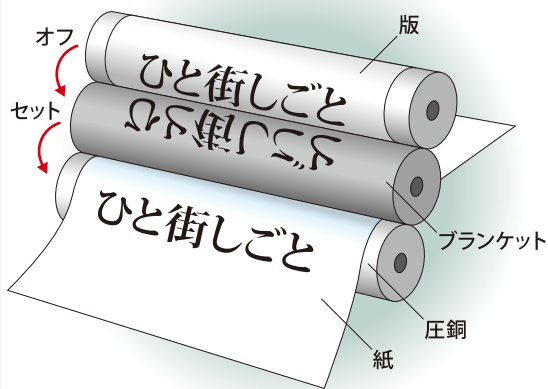
終戦直後、本好きの旦那さんと二人で露店からアテネが発売した頃のこと、東京の取次店がリュック一杯に本を詰め込み、二人の手で持てるだけ持って、汽車で札幌まで運んだこと。そして朝、開店前からお客さんが行列を作っていたことなど。

で、細かい字が読めないというのなら、マンガでもヘアヌード写真集でも買って店を応援しなければ、それこそ灯が消えてしまう(私もニヤン2倶楽部を毎月買っている)。札幌の文化のレベルがこの程度ということなのだろう。札幌最後の本屋の灯がもうすぐ消えていく。私の中でも何かが終わろうとしている。それは本の中毒患者にピリオドを打つ時かもしれない。

印刷の話② リトグラフとオフセット印刷の関係

前号で、活版印刷はもはや絶滅の危機に瀕していると書きましたが、実のところすでに印刷といえば100%オフセット印刷のことを指す時代になりました。そのオフセット印刷が人気アート、リトグラフと大いに関係があるというのですが…

オフセット印刷(平版)



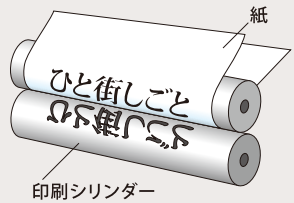
活版印刷とオフセット印刷の大きく異なる点は、版と紙が直接触れるかどうかということ。オフセット印刷は版と紙がオフ、触れることはありません。では紙が版に触れなくてどうして印刷できるのか。この理由にリトグラフが関係しているのです。

リトグラフ(石版画)とは、18世紀末にドイツの印刷職人が偶然に発見した平

凸版(活版・木版)



凹版(グラビア)



多くいます。

このリトグラフの原理が、平版原版からいったんインキを丸い胴に転写し、それから紙に印刷するという“二度手間”の間接印刷に発展し、今日のオフセット印刷の完成へとつながっているのです。

この過程での大きな発明は、版と紙の間にゴムの円筒(ゴムブランケット)を入れたこと。転写する際に、水まで紙に付着することを防ぐためです。ゴムは水をはじきますから、ブランケットにはインキしか写されません。つまり一度インキが版面から離れて(オフ)ゴム銅に転写され、それから紙に印刷される(セット)という、「オフセット」の意味がここにあるのです。

改めてオフセット印刷の工程を整理しますと、親油部分と非親油部分に薬品処理された刷版(アルミ板)が巻かれた版胴に、水とインキを供給しながら、インキ部分(新油部分)をゴムブランケットに転写し、さらに用紙に転写する——ということになります。大量、高速、低コストの時代にふさわしい印刷方法です。

版印刷の手法です。石灰岩の表面にクレヨンで絵を描き、薬品を塗って水を吸う部分と水をはじく部分を作った後、水洗いします。そしてローラーでインキを塗って、絵の部分だけに付着したインキをプレス機で刷り上げます。今日では垂鉛版やアルミ板などが使われ、使用する色数だけ版を作れば多色刷りも可能ですから、リトグラフを手がける著名な画家も

●出前でアドバイスを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、印刷担当者や編集者がお伺いしてアドバイスをいたします。グループでもどうぞお気軽にお申し込みください。

●記念誌で歴史を残す
企業や団体が二千年、三十年と歴史を重ねていくうちに、人が変

●小紙をお送りします
忙しい毎日、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙です。ご希望の方に無料でお送りいたします。印刷紙工までお申し込みください。



本づくり質問箱

本づくりの「？」にお答えします。お気軽に質問をお寄せください。



地方都市に住んでいるのですが、近隣に本づくりを引き受けてくれそうな印刷会社がありません。原稿書きも途中で止まったままなので良いアドバイスがほしいと思っています。遠く離れた札幌の業者に依頼してもうまくいくでしょうか。

地元に適当な印刷会社がないが



新聞にも本づくりを請け負ってくれる道外の出版社の広告が載っているように、離れていてもさしたる支障はないでしょう。ここはと思う印刷会社がありましたら、そこのパンフレットや刊行物を送ってもらおうとよいでしょう。原稿が完成していて予算が決まっていれば、料金や入稿から納品までのプロセスなどの打ち合わせなど

がすぐできます。間違いのないものを作るために、校正のやり取りをどうするか、よく打ち合わせておくことも必要です。

ただ、この欄で何度かお答えしているように、自分がこれでよいと思っても、他の人に見てもらうものとして申身が整ったものであるかどうかは、やはり第三者のアドバイスを仰いだ方が賢明です。

原稿を書き始めてもなかなかうまく進まないのは、資料不足や本文の構成などに原因があることも

ありますので、そのあたりのアドバイスもしてもらえる業者を選ぶことです。さらに機会をみてそちらに伺って、面談や補足取材などの出来るスタッフがいるところであればなおよいでしょう。

